

吳淞における沈從文

はじめに

沈從文（一九〇二—八八）は、一九二七年末より三一年初夏青島に移るまでのおよそ三年間、上海において文學活動を展開した（途中半年に及ぶ武漢大學時代を含む）。後に梁實秋と、沈從文自身が否定しているにもかかわらず、所謂「新月派」の一人と目されることが多く、従って上海滞在時期の沈從文の作品といえ、例えば『新月』創刊號に登載された「阿麗思中國遊記」などが直ちに想起されるのではないかと思われる。同時に沈從文が胡也頻・丁玲と語らって佛租界・薩坡塞路二〇四號の公寓に活動の據點を置き、一九二九年一月より文藝誌『紅黑』『人間月刊』を發行していたことも廣く知られる。沈從文は北京から合流した徐霞村等と『熔爐』という雑誌の創刊にも關わり、また趙景深の主宰する『現代文學』誌に寄稿するなど旺盛な創作活動を行っていたが、その後の展開については、文學史の關心は從來、一九三一年一月に發生した胡也頻の逮捕と處刑の顛末に向けられていて、沈從文が一九二九年後半から三〇年前半に至る一年間、ひとり上海北郊の吳淞砲臺灣なる中國公學大學部（以下當時の慣用に従い「中公」と略稱することがある）において教鞭を執っていた經過については、ほ

とんど注意が払われることがなかったように見える。しかし上海滞在中に發表された沈從文の作品について検討を加えるならば、この時期から現れるようになった特徴のうち、後の作品にまで受け繼がれる幾つかの點には、中公との深い關連が認められる。小論は、沈從文の吳淞における経験をめぐって、この時期の沈從文文學の一側面を明らかにせんとするものである。

中野知洋

そもそも沈從文の就職の話は、前述の雜誌經營に行き詰まって債務返済の目途が立たなくなり、時局の變化によって出版社もなかなか彼等の原稿を引き受ける者がなかったときに、生活を支える手段としてもたらされたものであった。學歷のない沈從文が中公に迎えられたのは、徐志摩の推輓と、校長である胡適の招聘による。異例の抜擢ということで贊否相半ばしつつも注目を集めたいらしい。初めて教壇に上って立ち往生したなど話柄に事缺かない。「記丁玲女士」の述べるところは後に丁玲本人の反論を招いた經緯もあるけれども、胡也頻が濟南において教職を得るに當たり紹介の勞を執った陸侃如と馮沅君とは沈從文の中公と暨南大學における同僚であるし、沈從文の口ぶりに據れば胡也頻と丁玲もまた機會さえあれば上海で大學の教壇に立つことを希望していたと考えられる。

一 「吳淞文壇」と中國公學

助教として採用された沈從文が中國公學大學部において擔當した科目は、「現代文學研究」と「新文藝試作」である。後者は學生に作品制作の實習をさせてそれを添削する授業であったと思われる。後に沈從文夫人となる張兆和氏の二學年上、文史學系四年に在籍していた羅爾綱は、沈從文の授業に出席して、作品十篇を試作したという。文科系の學生の旺盛な創作意欲は、大學の學課によって、支えられていた譯である。また學生のひとり劉宇は、次のように述べる。

○我讀了它們，我也想寫詩。其實真正開始寫詩，還是胡適之、徐志摩、沈從文諸先生鼓勵起來的。（それら「郭沫若」「三個叛逆的女性」所收の詩）を讀んで、私も詩を書いてみたいと思ひました。しかし實際には本當に詩を書き始めたのは、やはり胡適・徐志摩・沈從文の諸先生が勵ましてくれたからでした。

しかく活潑な創作活動を展開して沈從文に刺激を與え續けた功勞者は、主に中公に在籍していた學生達であつたと思われる。吳淞における學生の文藝創作の流行とは、どれほどの規模で行われていたのであろうか。

吳淞は、上海からは滬滬鐵路で、始發驛の寶山路駅から終點の砲臺灣站まで一五・八七キロの道程、この時期には、中國公學・國立同濟大學・江蘇大學（第四中山大學）醫學院のほか、水産學校や商船學校など複數の高等學校が運営されていたから、港灣都市でありながら比較的にぎやかな學生街を形成していたと推測される。

『讀書月刊』第二卷第三期（一九三一年六月）は佚名氏による「吳淞文壇——上海文壇最重要的一個分支——」なる消息記事を掲載し、吳

吳淞における沈從文

淞に小規模の文藝團體が多數存在して、文藝創作が盛況を呈していることを述べた。なかでも中公政治經濟系の學生・何家槐の組織する白虹文藝社の活動が詳述される。「白虹」とは「隔岸起飄風、浪打吳淞、血湧半江紅、白虹貫日中」云々という中公の校歌を典據とした言葉で、同校の出版物の名に冠せられることがあつた。記事に見える王一心・劉宇・孫佳訊・傅潤華はいずれも中公大學部所屬の學生であるから、指導員として擧げられた六人の文學者のうち徐志摩と邵洵美を除いてすべて同校の教員であるのは、學生が擔任の教師に指導を仰いだということかと思われる。教員もこれに積極的に應じたようで、例えば中公の學生詩人の一人王一心は、後に詩集出版に當つて胡適から「失眠」詩一首を削除し、「新的發現」詩の第一節・第二節・第六節を割愛するよう勧められるなど、細部まで添削を加えられたと告白する。沈從文は、すでに名の通つた小説家であり、しかも「新文藝試作」を擔當していたのであるから、このような場合うってつけの人物であつたと言ふべきで、積極的に學生と交流して朱筆を振るつたようである。學生達の殘した作品の中に、沈從文の査讀を経たことを示す謝辭・獻辭が殘されている。

ところで彼等中公生がいかなる興味と關心から熱心にサークルに集い、詩に親しんだかは明らかである。右の王一心に據れば、

○第二年的春天我出版了處女詩集『忘憂草』，同時與孫佳訊・葛賢甯等組織「新東方詩社」，發行『新東方詩刊』，一方面又與劉宇・邵冠華合編一部『詩選』，那是我詩興勃發的初期，詩的產量自然比較多；因爲年紀輕，（那時只有二十歲）同一般年青人一樣的歡喜談戀愛，差不多完全在「情詩」上用功夫。（翌年の春、私は處女詩集『忘憂草』を出版したが、同時に孫佳訊・葛賢甯達と

新東方詩社を組織し、『新東方詩刊』を發行した。他方ではさらに劉宇・邵冠華と一緒に『詩選』なる雜誌を編輯したけれども、それは私にとつて熱心に詩を作り始めた最初の時期であり、その量も自ずと多めであつた。私は若かつたから(わずか二十歳だったのだ)、普通の若者のように戀愛を語り合うことを好み、ほほ完全に「戀愛詩」に時間を割いていたのである。

すなわち若者達は戀愛を語ることを好み、熱心な者はそれだけに飽きたらず詩を作つて感情を謳い上げたということになる。言い換えれば、詩は戀愛を謳うための器として流行してゐることが窺える。この記述は、中公の風景を滲ませた沈從文の短篇「自殺的故事」(後述)に描かれた學園風景とも照應する。ここでは學生の間で盛んに行われた學課外のクラブ活動の様子を同じく沈從文の「平凡故事」(『文藝月刊』第一卷第二號、一九三〇年九月)に見る。

○勻波、××教會大學文科三年級正式生、按照身分、這個人如其他許多講規則的教會大學校的好學生一樣、選課很多、對於功課都做得很好。風氣所歸、這人另外讀過一些中外名著、自己又會擊筆寫散文寫詩、作品皆登載到學校刊物、同別的不甚著名刊物上。他是學生會的會計、和別兩種會的會員。「……」課餘無事時候、幾個同學在一處、總是談談空洞的希望、或者關於文學、或者關於愛情。「……」他的所謂根本問題、似乎是不出他身分上的幾種事情、生活、愛情、文學。一個大學生、對前途有希望、口上心上、離不了這些問題、那是應當的。(勻波は、××教會大學文科三年の本科生で、その身分に相應しく他の多くの規則重視のミッション・スクールの優等生同様授業をたくさん取り、どの科目もよく出来た。「當時の」學生の氣風で、學課の他にも國內外的名著を少し

ばかり讀んだことがあり、自分もペンを取つて散文や詩が書け、どの作品も學校の出版物とそれほど有名でない他の雜誌に掲載された。彼は學生會の會計係で、他にも二つの會に参加していた。「……」授業がなくて暇なときには、同級生達と集まって、いつも現實味のない望みや、文學や、愛情問題について議論していた。「……」彼の言う「根本問題」とは、學生という身分から來る生活、愛情、文學というような幾つかの問題の範圍を出ないものようであつた。大學生というのは前途に希望を抱いており、これらの問題が四六時中口や頭から離れないのは、當たり前のことであつた。)

作品が發表された時期から、「××教會大學」は中公をモデルとする判断される。主人公の所屬する文學同好會において文學と愛情問題とが同じ比重を以て語られたことが分かる。學生の戀愛談義によつて生まれた詩とは、例えば劉宇の次のような作品であると思われる。

○要是我的心將永遠的像死水；／那只好在香煙裏迷戀，苦酒裏醉。／我希望過去的事實都變成了詩材；／在悲哀裏找出快樂，快樂裏找出悲哀。(もしも私の心が永遠に水たまりのようであるならば、／ならば煙草に溺れ、苦い酒に酔ひ痴れるしかない。／私は希望する、過去の出來事が全て詩の材料に變つていくことを。／悲しみの中から楽しさを見つけ出し、楽しさの中に悲しみを探し出す。)

卒業アルバムから、中公生の卒業制作もまた、戀愛詩が大半を占めることが確認される(註(19))。もとより在り來たりな言葉を並べた稚拙なものばかりではあるが、その中には沈從文の添削を経たことが分かる作品も含まれる。ただし、學生間の戀愛詩の流行は、いわば學園

内に限られた現象であつて、必ずしも世間一般の好尚に合致するものではなかつたと思われる。さらに王一心の述べるところによつて當時の状況を示す。

○新詩在中國、時代似乎是不需要它了。「……」直到現在、幾個作詩的老夥友是再也不作詩了！天疇已經發誓過「不再歌唱」家槐與轉蓬也走向他們的康庄大道作小說、不再走詩的死路了！此外如霜葵、誠性、儒珍……他們也已經不再叩詩宮的門。只有我、英樵、詠平、莊偉……還在繼續走我們的死路！（新詩は中國において、もはや時代に必要とされなくなつたようである。「……」今や詩を作つていた仲間たちも、止めてしまつた。「張」天疇は、「もう歌を歌わない」と誓いを立てた。「何」家槐と「徐」轉蓬も小説という彼等の廣くて眞直ぐな道に向かつて進み、もう詩のような袋小路を行きはしない。他に例えば霜葵・誠性・儒珍たち……も、もはや詩という宮殿の門を叩くことはなくなつた。ただ私と「李」英樵・詠平・莊偉だけが、今なお出口のない道を歩き續けている。）

學生の間で最も盛んに行われていたのは詩の制作であつたとしても、學生詩人が詩によつて生計を立てようとするのは容易ではなかつた。何家槐や徐轉蓬のように、詩に見切りをつけて、小説の創作に方向を變えた者も多かつたと思われる。詩集出版で生計を立てるなど思ひもよらぬ状況に置かれても、元學生の中には自費出版による刊行を志す者がいた。沈從文は自ら編んだ劉宇の詩集に序を寄せて、過去に自費出版を餘儀なくされた詩人とその詩集を列舉し、詩をものして食えない状況に嘆息する。職業作家という自意識がことのほか強く、およそ自敘傳的な小説の中に具體的な數字を擧げて原稿執筆料への不満を

吳淞における沈從文

述べないことのない沈從文であるから、いかにもこの小説家らしい序文と言ふべきで、詩集刊行に當たつて私費を擲たなければならぬ情況を腹に据えかねたものであろう。「劉宇詩選」刊行のため沈從文は鍾敬文とともに經濟的な援助を與えているのである。

二 徐志摩と沈從文

ところで、沈從文がかつて徐志摩の援助によつて一躍流行作家となる轉機を得た、一九二五年前後の経緯については、すでに諸氏の説くところであるけれども、中公と沈從文との關わりにおいても、やはり徐志摩の存在が大きく浮かび上がる。いま梁實秋の語る場所に據れば、沈從文の『新月』における立場はほとんど居候のようなものであつて、『新月』創刊に當たつて長期連載を貰へたことは徐志摩の口添えによる異例の措置であつたようである。さらに學生詩人・小説家達が口を揃えて語るのも、創作活動に當たつて徐志摩が與えた支援や督勵であり、この點沈從文が引き立てられた経緯と大差ない。王一心はじめ何家槐・劉宇・孫佳訊等がいずれも『新月』に作品掲載の機會を與えられているのも、概ね徐志摩の計らいによるものであると思われる。再び王一心に據れば、

○我雖然十三・四歲時就歡喜詩，但真正開始走向詩歌的路要從民十九在吳淞讀書的時候算起。那時候受了詩人徐志摩先生的鼓勵，使我一顆嗜好文學的心純粹傾向到詩歌方面來。由於跟新月派諸詩人較多接近的緣故，無意中我的詩也受了「新月派」的影響。（私は十三、四歳の時にはもう詩が好きだつたけれども、本當に詩歌の道を進み始めたのは民國十九年吳淞で學んだときから數えなければならぬ。その時詩人の徐志摩先生の激勵を受け、私の文學

を好む心がただだ詩歌という方面に傾いて行った。新月派の詩人達と近づくことがわりと多かったために、私の詩も無意識のうちに「新月派」の影響を受けていた。

中公の文學學生と所謂「新月派」の詩人達との交流の緊密さを窺わせるとともに、「吳淞文壇」が「新月派」の影響を受けた學生の活動であることを示す記述である。

一九三〇年一月より舒新城の求めに應じて中華書局の主編に就任した徐志摩は、光華大學や南京中央大學への勤務等で多忙であつたため、「新文藝叢書」のうち翻譯を除いた部分の編集を實際には沈從文に任せていたと言われる。沈從文の『石子船』(一九三二年一月)が同叢書に編まれているのも、徐志摩『輪盤』(一九三〇年四月)に沈從文が一見分不相應な序文を書いているのも、このためであると推測される。徐は同年末には大東書局の編輯も兼任して、「新文學叢書」の編集も沈從文に行わせた。何家槐なども行き場に困った原稿を大東書局に持ち込んでいるが、これもまた徐志摩の配慮によるものである。

○他最關心我的第一集小説。他原把介紹到新月，因爲一時支不到稿費，又替我轉送到大東。那裏印得慢，生怕我着急，又只得把我交還新月。爲了它，他不知費了多少周折，受了多少麻煩。(彼「徐志摩」は私の最初の小説を最も氣にかけてくれた。彼はもともと「小説を」新月社に紹介してくれたのだが、すぐには原稿料が払えないというので、私のために大東書局に轉送してくれた。そこは印刷するのが遅かったので私が氣を揉んでいるのではないかと心配して、また私「の小説」を新月社に戻した。この小説の出版のため彼がどれだけ手を焼き、迷惑を被ったか分からない。)

大東書局の『現代學生』(一九三〇年一〇月創刊)は、この年相繼い

で生まれた學生向け総合誌のひとつで、『中學生』(開明書店、同一月創刊)と競争して部數を伸ばした大東の主力雑誌である。劉大杰が編輯に當たり、その創刊號は胡適「健兒歌」を筆頭に理事(校董)の蔡元培の論文と、その長女蔡威廉の口繪、徐志摩の翻譯など、中公關係者の寄稿によって占められる。沈從文もまた創刊號より「一個女劇員的生活」の連載を與えられているから、これは『新月』における「阿麗思中國遊記」連載の経緯とまったく同じであると言える。後述するように沈從文の中公における講義録と推測される「我們怎麼樣去讀新詩」が『現代學生』創刊號に登載されるのも、また大東書局より上梓された處女評論集『沫沫集』が小説集でなく文藝評論であつたのも、もとを辿れば中公で得られた縁故と徐志摩の仲介あつてのことと思われる。やや餘談に亘るが、『現代學生』第一卷第二期が胡也頻の短篇小説「黑骨頭」一篇を掲載することも注目される。第二期が刊行された一九三〇年十一月といえれば上海の書肆はすでに丁玲と胡也頻の「普羅作品」の掲載を憚って取り上げようとしなくなっていたから、徐志摩が見かねて生活の便宜を與えたと考えられる。「黑骨頭」は、高揚した筆致で肉體労働者の革命運動参加を謳った小説であり、果たして該誌は檢閲によって再版時に別の作品への差し替えを迫られるなど迷惑を被ったとされる。胡也頻にしてみれば生活が苦しくとも『新月』に寄り掛かることは出来なかったが、學校關係者によってなる學生雜誌ならばと妥協したということであろうか。しかし沈從文との關係を考えれば、一九三〇年前後の胡也頻の思想的な展開を理解し、さらに胡也頻はなにも知らなかったという丁玲の辯明を聞いてもなお、『現代評論』を主要な活動の場とし、『中央日報』の副刊「紅與黑」(一九二八年一〇月終了)を最後まで中心となつて編集した胡也頻が、『新月』

(同三月創刊)にだけは初めから一篇の作品も發表していないことに、かえって不思議な印象を抱くのは筆者だけであろうか。

何家槐や王一心のような文學學生は、實際に沈從文、徐志摩あるいは「新月派」からどのような影響を受け、それは果たして作品にどのようなに反映されているのか。例えば劉宇の詩「在滬杭車中」(『劉宇詩選』)は、徐志摩の「滬杭車中」(『志摩的詩』)を直ちに連想させるけれども、その直接の影響關係を指摘するのは容易ではない。以下若干の考察を述べれば、何家槐「猫」(『小説月報』第二卷第一〇號、一九三〇年一〇月、のち『曖昧』良友圖書印刷公司、一九三三年一月所收)について、沈從文の同僚である趙景深が、

○當我看到猫的時候、我以為作者有一點沈從文的文句、因為在句的認識上、有這些處是顯得很奇特的。但是當我把其餘的幾篇都看完了以後、對於這一種印象、我就沒有了。作者的句子、是在細緻中、自有他的流利的。(「猫」を讀んだとき、私はこの作者には些か沈從文の文章の影響があると思つた。それは彼の文章に極めて特徴的なもののあるのに氣付いたからである。しかしほかの幾篇かを全て讀み終えたあとには、そのような印象はなくなつていた。作者の文章は、緻密さの中に獨自の滑らかさがあつた。)

と、片言隻語を捉えて唐突に沈從文の影響を持ち出すのは、あまりに突飛な連想であると言えるから、恐らくは沈從文の作品指導の日常を知る者の發言であると思われる。趙景深は劉宇の詩についても類似的評語を残しており、「早知道這世界原沒有我的分；／後悔當初太冒昧的由鬼變成了人。」(想到)の用字が、徐志摩「我再不想成仙、蓬萊不是我的分」という詩句を踏まえたものであるとするのも、右の何家槐の例と同様であろう。

吳淞における沈從文

學生達が熱を入れた詩の創作について沈從文の述べるところを見る。沈從文が創作以外に文藝評論を陸續發表し始めるのは、中公に奉職した直後からであり、そのうち詩に關する評論が多數を占めているのは、中公における詩の活動と大きな關連があると考えられるからである。沈從文の文藝評論は、ほとんどが大學での講義ノートを活字にしたものであるらしいから、この時期詩に關する評論に重點が置かれるのは偶然ではないと思われる。學生の流行に敏感に呼應するのは自然であり、また詩が小説に較べて授業で學生に作らせ易いことが考えられる。その第一作「我們怎麼樣去讀新詩」が『現代學生』創刊號に掲載された理由も、先に見た中公と大東書局との關係を考えれば明らかである。ここから沈從文の現代詩に對する知見の全體が鳥瞰される。彼は新詩を三つの時期、すなわち一、嘗試時期(民國六年より一〇年もしくは一二年)、二、創作時期(民國一一年より一五年)、三、沈黙時期(民國一五年より一九年)、に分類し、この三つをさらに前後二段に分割して、それぞれ代表的な詩人を列擧する。第一期は胡適によって文學革命の理論が提唱され、第二期に至つて新詩の形式と技巧が完成したと整理し、第三期には第二期の影響を受けつつ新たな方向を進んだが、文藝誌における詩への關心は退潮の兆しを見せ、その作品も第二期を追い越すことは難しく、沈黙の情況にあるとする。この文章はなかなかの力作ではあるけれども、一見して明らかかなように沈從文の文藝評論は、論理が大雑把でしかもその價值觀の據つて立つところがどこにあるのか捕捉することが困難である點に特徴があり、舊來の知友を適當に配列しただけではないかと疑わせる。やや注目されるのは、第三期に擧げた詩人のうち石民・邵洵美・劉宇のグループについての評價である。身近にいたはずの劉宇にも大きな紙幅を割いて、

○劉宇是最近詩人，他的詩在聞一多・徐志摩兩人詩的形式上有所會心，把自己因體質與生活而成的弱點，加入在作品上，因此使詩的內容有病的衰弱與情緒的紛亂，有種現代人的焦燥，不可遏制的亂，抑制できないほどの現代人の焦燥感が表現されている。）と述べているのは、「新月派」の影響を指摘した記述として重要であるし、後述するこの時期の沈從文作品の傾向と符合する。

中公に引き續き一九三〇年後半より赴任した武漢大學においても、ほぼ同じ觀點に従って講義が行われ、講義録とともに授業内容に沿った副讀本として「現代中國詩集」という詞華集まで編まれていて（國立武漢大學編印『新文學研究』刊行年不明、排印本、所收）、これによって沈從文の詩についての趣味を知ることが出来る。ここから徐志摩との繋がりにおいて最も注目を引く一例を挙げる。沈從文は目標や生き甲斐を見失った不透明な人生を、しばしば「一個灰色的生命、靈魂是病的靈魂。」（『不死日記』八月十三、『不死日記』人間書店、一九二八年二月）という風に「灰色」という言葉で表現する。頹廢的な雰囲気を感じたこの言葉は、一九二八年二月の「老實人序」（『現代評論』第七卷第一六五期）以來「不死日記」に至る沈從文の自叙傳的な作品にしばしば現れる「空虚（または空洞）」「下沈の心」などとともに、北京から上海に移る時期の沈從文文學の特色を示す重要な用語であり、吳淞時期に近いところでは、「知己朋友」（『現代文學』第一卷第六期、一九三〇年十二月）の主人公がこの言葉を用いて人生觀を表現することが注目される。

○你們很多人是都知道我在生活上總是不舒服的。我總是喜歡發一點空洞的感想。我總是有點灰色。我總是做夢，又在夢醒時節情形中，大聲的嚷，這生活如此下去不行。（多くの人は、誰も私の暮らしぶりがそれほど快適なものではないことが分かっているだろう。私はいつでも現実味のない感想を漏らすことを好む。私はいつも少しばかり憂鬱である。いつも夢を見ているが、同時にまた夢から醒めたときの状態で、大聲で叫んでいる、こんなふうになんか活し續けてはいけない、と。）

夢を見るときは沈從文が好んで用いる表現であり、全體に漂う虚無感、何家槐「夢醒的時候」（『新月』第二卷第二期、一九三〇年二月）との影響關係も考えられる。このような發想が徐志摩「灰色的人生」（『志摩的詩』上海新月書店、一九二八年八月改訂版）の次の一節に據るところとは疑いを容れない（引用は『新文學研究』所收「論徐志摩的詩」による）。

○來，我邀你到民間去，聽衰老的，病痛的，貧苦的，殘毀的，……和着深秋的風聲與雨聲，——合唱的「灰色的人生」！（さあ、あなたを民衆の中へ迎えよう。聞け、老いさらばえた、病苦の、貧困の、不具な、……晩秋の風雨の音とともに、合唱する「灰色の人生」を！）

沈從文はこの一段を『志摩的詩』のうち徐志摩の特徴の最もよく表れた文章として挙げる。また省略個所には「煩悶的」「懦怯的」「自殺的」（後述）など、これも沈從文が好んで用いる常套句が並んでいるから、ここに徐志摩の色濃い影響を指摘出来ると思われる。

以上、吳淞における文學青年の活動と交流という視點より論述を試みて来た。沈從文もまた學生と共に「吳淞文壇」の一角を占めており、その背後には徐志摩の存在が大きく浮かび上がるといふことを指

摘した。次に沈從文自身の創作活動に話題を移して、更に検討を加えることとする。

三 創作活動と作品

第一節『吳淞月刊』と『自殺的故事』

さて、中公在職中に編集・出版された大學の學術刊行物の中から、沈從文の創作活動の痕跡を確かめることが出来る。『吳淞月刊』は、巻頭に都市から隔離された地域に新しい學風を打ち立てようとした胡適「發刊詞」を掲げた社會科學分野の學術誌で、一九二九年四月創刊以來第七期（一九三〇年七月）まで刊行されたという。「發刊詞」によれば、雜誌發刊は學術振興を願う胡適個人の意志によるものであると思われる。執筆者は、羅隆基・楊鴻烈・陸侃如・高一涵等おむね中國公學の教員であるが、第四期（一九三〇年一月）には章炳麟「音韻學通論題辭」を載せる。この第四期には、沈從文の「自殺的故事」が掲載されている。『吳淞月刊』は實證主義を謳った學術誌であり、全篇論文で占められているから、「自殺的故事」が小説であるのはむしろ例外に屬する。

「自殺的故事」は、一九四〇年の主人公が、二八年當時の浮薄な學生生活と學園風景を振り返り、批判を加えるという設定の近未來小説である。これまで同作品は『沈從文甲集』への書き下ろしと考えられてきたけれども、大學の學報に寄せられたものと判明したことによって、ここに描かれた學園生活が中國公學を描いたものであるという蓋然性が指摘出来るよう。そして『沈從文甲集』所掲の作品のうち「冬の空間」「第四」「自殺的故事」三篇も、吳淞及び中國公學における日常生活に取材したと考えられる作品である。このような書物が一九三〇

年六月に出版されたことを考えれば、『沈從文甲集』という書物の性格は、中公時代のアンソロジーであると判断される。

興味深いことに、「自殺的故事」には、沈從文の小説作法を窺う一つの話柄が見える。

○「……」一個早上江邊却發現一個男子的自殺事情。全學校得到這信息，皆到江邊去看。那時候大學生，一點娛樂也沒有，自然是只好把這件事當成一個新奇有趣味的消息了。「……」我不知爲甚麼，却爬起來也走到江邊去了。在路上碰到許多人，皆是看過這樣熱鬧的事回來的，每人皆像很滿意的看到了一件奇事，每人皆非常有興味的談到死者方法的離奇。「……」ある朝「長江の」河邊で男が自殺したのが見つかった。この知らせを聞くと、全校擧げて皆河邊に見に行ったものである。そのころ大學生には、なんの娛樂もなかったもので、この事件を目新しく面白いニュースだと思ふことになったのも、無理からぬところであった。「……」なぜかは分からないが、私も起き上がって川岸へと行った。途中多くの人と出くわした。みなこの騒々しい出来事を見物しての歸りだった。誰もみな満足してこの珍しい出来事を見たようで、とても興味深そうに自殺者の死にかたの奇妙さについて語り合っていた。現實の世界に興味を失った主人公の虛無感が自殺という發想を生むという展開は、「知己朋友」と同様であるけれども、「自殺的故事」は、直接的にはこの自殺騒ぎに觸發されて執筆を思い立ったものと思われる。この自殺を末尾に配置して、本來嚴肅であるべき人間の死を娛樂に供する學生（知識人）の輕薄さを批判するのである。この出来事は、「冬の空間」（『沈從文甲集』所收）第七章末から第八章冒頭にかけて挿入された、校外の食堂の料理人の自殺騒ぎを下敷きにして考えると考

られる。「冬の空間」は、吳淞にある「私立××大學」(中公と思しい)を舞臺に展開される情景を詳細に描寫した自叙傳的な小説であるから、そこに描かれた事柄は、現實に取材されたものである可能性がより高いと思われる。この自殺騒動は、恐らくは娯樂の少ない日常を過ごす學生達を驚かせた、一つの事件であつたに違ひないとは思われるが、「自殺的故事」においては、教訓的な意味を持つ一種の寓話として書き直されている。

しかく上海時期の沈從文作品には、「自殺」という言葉がしばしば用いられて、時に主題として大きく取り上げられるという傾向を有する。「自殺」はこの時期の沈從文作品を理解する重要なキー・ワードの一つである。沈從文作品の中で「自殺」が積極的な意味合いを持ち始めるのは一九二七年頃からであるが、吳淞における沈從文の創作活動と照らし合わせたとき、「自殺」という主題はより明確な形で意味を持つのである。いま試みに上海において執筆されたと考えられる沈從文の作品のうち、「自殺」に觸れる主な作品を挙げれば、以下のようである。

「記一大學生」(『旅店及其他』中華書局、一九三〇年一月)

「自殺的故事」(『吳淞月刊』第四號、一九三〇年一月)

「冬の空間」(『沈從文甲集』神州國光社、一九三〇年六月)

「薄寒」(『小説月報』第二卷第九期、一九三〇年九月)

「知己朋友」(『現代文學』第一卷第六期、一九三〇年二月)

ここに示した作品は、全て學校と關わりがあるものばかりで、「自殺的故事」が未來という視點からの學園風景の回想という設定である以外は、いずれも教師を主人公とすることが注目される。これらの作品に描かれる「自殺」は全て前述の「戀愛」と結びついた結果發想され

るものであり、失戀はすぐさま自殺の連想を招き寄せる。例えば沈從文はその作品の中で少なくとも三度『若きウエルテルの悩み』に言及していることから(註(40)所掲拙論)、戀愛と自殺とはすでに言葉の中で密接に結び付いていたと考えられる。これは必ずしも都會の男女を描いた所謂「都市もの」(小島久代氏)に限った事柄ではなく、例えば「媚金、豹子、與那羊」(『人間月刊』第一期、一九二九年一月)のような、湘西の民間傳承に取材した作品の中にも同様の結末が用意されるのは、上海において獲得した作風の實踐例であると考えられる。

第二節 中國文學系系會について

これまで、吳淞に展開した文藝團體は、そのほとんどが中公學生による課外活動であること、學校側も學術誌刊行などの機會を作つてこれを援助したと考えられることを確認した。張兆和氏なども學生として出版社に出入りをしていた形跡が窺える(註(3)所掲趙景深「沈從文」)。「吳淞文壇」と呼ばれた彼等の活動に、沈從文がどのように関わっていたのか、さらに考察を續ける。沈從文が胡適に寄せた書信には次のようにある。

○若馮君來、于同學及從文本人皆爲幸事、故仍盼去信馮君約其來申、學校多有一作者、同學方面向前機會更多、將來或且有不少同學能在創作一面有好成績。(馮「文炳」君が來るのであれば、同學にも從文自身にも幸いなことなのですから、やはり馮君に手紙を寄せて、上海に來ることを確約してもらふよう切望致します。學校に作家が一人増えれば同學達についても向上の機會がさらに増えるわけで、將來多くの學生が創作のことでよい成績が上げられるかもしれません。)

このとき中公では學校が把握していた團體だけで文科系・理科系併せて一八の社團・研究會が活動していた。⁽⁴²⁾ その中には文藝研究に關わると思われる研究會も幾つか認められるが、沈從文との關わりからは、その一つ中國文學系會の機關誌『中國文學季刊』が注目される。中國文學系會は學業を鍊磨し親睦を深める（砥礪學業、聯絡感情）ことを主旨として教職員と學生共同で設立した團體であり、陸侃如や張兆和氏の親友王華蓮等を責任者とし、羅爾綱等學生が實務を擔當している。會員には、教職員からは胡適をはじめ儲皖峯・鄭振鐸等一三名が名を連ね、學生會員八七名の中には王華蓮・羅爾綱のほか劉宇の名前が見える。沈從文は第二期に参加しているが、該誌は種々の資料によって第二期を以て刊行を終了したと考えられる。沈從文が奉職するより先に刊行された創刊號は全篇が學術論文であるが、第二期はずいぶん趣を變えて詩歌・散文・小説・戯劇と、創作で占められる。このうち第二期に「建設」及び「沈」的序二作品の初出を確認することが出來た。短篇小説「建設」は、從來『沈從文集』（上海新月書店、一九三二年五月）への書き下ろしであると考えられていた作品である。「沈」的序には、相繼いで執筆された「生命的沫題記」とともに、この時期の沈從文作品の主題が總括される。⁽⁴³⁾ ここに示される生命力を失ひ沈み行く心という表現などは、前述の「灰色」という言葉と傾向を同じくするものであるし、一方「生命的沫題記」には、鼻血その他の病氣の記述や貧困など、初期の段階より同じ話題を反復しているものも見えるけれども、母親と妹のことに觸れるのは、上海の沈從文を頼って北京より轉がり込んだ母子のことを指すから、この時期に沈從文は新たな難題を抱え込んだことが分かる。いませ者の例を示す。

吳淞における沈從文

○我去年鼻血也特別流得多，脾氣也特別壞，工作，摧殘，鼻血，到今年，人便成爲中年人，蕭條中更缺少生趣了。看到上面的某幾篇文章，我的血，母親的病，幼妹的淚，都彷彿尙在眼前。今年還是血，還是淚，文章沒有了。力的衰頹，生命的迸散，我看到我自己的腐爛與滅亡，暗啞不敢作聲。（去年は鼻血もとわりわけ多く、癩癩ばかり起こしていた。仕事・過勞・鼻血、今年は中年の身體になり、うらぶれて生活の楽しみもいっそう少なくなった。上述の何篇かを讀むと、私の血・母の病・幼妹の淚が、それぞれになお目の前に浮かぶようである。今年になってもやはり血そして涙はあるが、文章はなくなつた。力の衰え・生命力の飛散と、自らの腐爛と滅亡を目の當たりにして、沈黙して言葉を失うのである。）⁽⁴⁴⁾

胡適に宛てた書簡には、これとほぼ同様の趣旨が並べられていて、これなども先ほどの「自殺」の描寫と同様、現實の生活における悩みの數々を、沈從文が作品の中にかなり安直に取り入れて書き連ねていることを示すものであると思われる。

まとめ

以上、沈從文の上海時期の作品に見られる傾向の多くが、中國公學における生活の中から生み出されたものであり、その大きな要因が、學生との切磋琢磨にあることを示すことが出來たと思う。キンクレイ氏がつとに述べるように、中公における經歷は沈從文という小説家に廣く社會的な地位を引き上げる契機を與えた。とりわけ重要なことは、この小説家の上海における活動の基盤が、『新月』という、いわば北京以來彼を支え續けた人間關係の延長線上に置かれていたという

よりも、中公を巡る多様な人間關係の中に求められなければならないという點である。中公における經驗は、貧困と女性に對する燒け付くような思いだけを繰り返して綴っていた初期の沈從文の作品に大きな轉換をもたらした點において、畫期的な意味を持つものと考えられる。なお紙幅の都合により説き及ばなかった吳淞時期の個々の作品論、とくにその精密な描寫と内容的な特徴によりこの時期の代表作と認められる。冬的空間については、續篇を草して検討を續けることとする。

沈從文が吳淞を離れたのは一九三〇年秋である。筆禍事件によって校長職を辭任した胡適の後を追うように教師の職を辭し、武漢に赴いたのは、やはり胡適と徐志摩の世話によるとされる。武漢大學文學院長は陳源、沈從文はたまたま聞一多が轉出した後の空席に着いたという。周知のように一九三二年一月の上海事變において吳淞は戰場となり、中公も灰燼に歸した。同校は以後しばらくの間佛租界・貝當路（現在の衡山路）に移轉して經營を續けたらしいが、やがて靜かにその歴史を閉じたと思われる。いま砲臺灣付近には閑靜な住宅街が廣がり、當時を偲ばせる建築物は殘されていない。

註

- (1) 梁實秋「憶《新月》」《文學姻緣》臺北文星書店、一九六四年一月、のち『梁實秋文學回憶錄』岳麓書社、一九八九年一月所收、および沈從文「二十年代的中國新文學——一九八〇年十一月七日在美國哥倫比亞大學的講演」《沈從文文集》第一卷。以下引用に當たつて異體字を通行の文字に改めた箇所があるほか、標點符號等も慣用に從つた。
- (2) 「徐霞村訪談錄」《新文學史料》一九九九年第二期。第一期をもつて刊行を終了した徐霞村主編『鎔爐』（上海復旦書店、一九二八年二月）には、沈從文「闕名故事」・丁玲「自殺日記」・胡也頻「父親和他

的故事」ほか劉呐鷗・杜衡・「姚」蓬子・趙景深・戴望舒が名を連ねる。彼等はひとしく薩坡塞路二〇四號に集つた朋輩であり、この顔ぶれは蓬子「我們的朋友丁玲」《丁玲選集》天馬書店、一九三三年二月）の述べるところと完全に一致する。一九二九年一〇月、上海郊外の松江で催された施蛰存の婚禮には、これに馮雪峰を加えたメンバーが参加したという（施蛰存「瀟雲浦雨話從文」、《長河不盡流——懷念沈從文先生》湖南文藝出版社、一九八九年四月）。

(3) 趙景深と沈從文との交流が中國公學での出会いをきっかけに始められたことは（沈從文）、《文人剪影》上海北新書局、一九三六年九月二版）、所謂「新月派」の枠を超えた幅広い創作活動を示すものとして注目される。趙景深は胡也頻『鬼與人心』（開明書店、一九二八年四月）出版に便宜を與え、沈・胡及び丁玲が遠東圖書公司より出版を企てていた文藝誌に發起人の一人として名前を貸すなど、彼等の創作活動に深く関わっていた（丁玲印象記、『丁玲評傳』上海春光書店、一九三四年一〇月）。

(4) 小論作成に當たつて参考にした中公大學部關連資料は以下の通りである。

- ① 中國公學大學部編『中國公學大學部一覽 十八年度下學期』（一九三〇年）
- ② 唐鴻烈「中國公學」《全國大學圖鑑》良友圖書印刷公司、一九三三年一月
- ③ 李次民「中國公學之學生生活」《中國學生》第一卷第三期、一九二九年三月
- ④ 王大祥「談談中國公學」《中國公學大學部預科庚午級畢業紀念冊》（一九三〇年）
- 吳淞全體の概観は上海市寶山區史志編纂委員會編『吳淞區志』（上海社會科學院出版社、一九九六年三月）、及び『民國二十四年 上海市年鑑』

(4) 上海市通志館、一九三五年四月)を参照した。①に収める胡適「校史」は同校の沿革を知る重要な資料であり、「中國公學大學部職員一覽 十八年度下學期」「同教授一覽」によって沈從文の授業科目が知られる。

(5) 沈從文「記丁玲女士」十『國聞周報』第一〇卷第三九期、一九三三年一〇月)

(6) 邵華強「沈從文年譜簡編」(『沈從文研究資料』下集、花城出版社、一九九一年一月) 九三九頁、及び糜華菱「沈從文生平年表」(北岳文藝出版社、一九九八年七月) 二五頁を参照。ちなみに楊家駱『民國名人圖鑑』第二卷(刊記なし)は、沈從文が最初に胡適と接觸する機会を持ったのは北京大學圖書館において沈從文が圖書目錄の作成を學んでいたときであり、胡適に小説を評價されたことにより師友の關係が結ばれたとするが、この記述を裏付ける資料は見當たらぬ。沈從文が胡適と相識するのは、中公就職の一件によると見なすが妥當と思われる。なお、沈從文が一九二五年三月、香山慈幼院に圖書管理員として招かれた後に北大圖書館に派遣された過程についての考證は、糜氏年表一四頁・一六頁およびその脚注に詳しい。

(7) 梁實秋「憶沈從文」(註(1)所掲書)及び羅爾綱「胡適瑣記」(『師門五年記・胡適瑣記』生活・讀書・新知三聯書店、一九九八年七月)など複数の回想録の述べるところで、凌宇「沈從文傳」(北京十月文藝出版社、一九九八年一〇月)もこの逸話を取るが、それによれば沈從文は著名な小説家を一目見に来た滿座の學生注視の中で言葉を發することが出來ず、およそ十分間黙り續けたり、また別の授業では最初の十數分で豫定の内容を話し盡くしてしまい、「我第一次上課、見你們人多、怕了」と板書して退場したという。

(8) 丁玲「也頻與革命」(『詩刊』一九八〇年三月號)

(9) なおこの時期沈從文は中公と兼務する形で國立暨南大學においても教壇に立っていたと言われ、孫俚工との共著『中國小說史講義』はそ

吳淞における沈從文

のときの成果であるとされるが、詳しいことはよく分からない。この時期の沈從文の書信の中には、暨南大學の用箋に記したものが見受けられる(『胡適遺稿及祕藏書信』第二七冊、黃山書社、一九九四年二月)。上海市檔案館に藏せられる暨南大學の職員錄『國立暨南大學職員錄』(一九二九年度)、『國立暨南大學全校職員錄』(一九三〇年度)、『國立暨南大學大學部教員報告表』(一九三二年度)、および『暨南年鑑一九三〇』より陸侃如・馮沅君が勤務していたことが確認されるが、沈從文の名前は見えない。同時に『暨南大學中國語文學系期刊』『南音』等暨南大學の刊行物にも沈從文が作品を掲載した形跡はない。沈從文が積極的に活動を展開したのはほぼ中公に限られると思われる。

(10) 沈從文「記胡也頻」二三及び三二(『時報』一九三二年一月)

(11) 「中國公學大學部教授一覽 十八年度下學期」(註(4)①所掲)

(12) 註(7)所掲羅爾綱書。中公の文藝同人誌(後述)の中にこの頃の羅爾綱の作品を見出すことが出来る(『老鳥征途』、『中國文學季刊』第一卷第二號、一九三〇年三月)。

(13) 「十年中印象較深的書」(『青年界』第八卷第一號、一九三五年六月)

(14) 許晚成編『最近調查上海大中小學校名冊』(北新書局、一九三三年一月)

(15) 「吳淞風景很美、文人薈萃、研究文藝的團體也非常多。在這些文藝團體中、以白虹文藝社為最重要。該社為青年作家何家槐君所組織、以研究文藝為宗旨。何君是寫小說的、他的作品已散見小說月報、新月、文藝月刊、及金屋雜誌中。……」他的作風、很像外國的丹農雪烏及柴霍甫、中國的徐志摩及施蟄存。他近來創作很力、不久就可見在小說月報、新月、青年界、及現代學生陸續發表。他的短著集、聽說已在收集整理中了。該社中其他社友、於文藝也都有很大的興趣。如王一心・劉宇・孫佳訊三人是寫詩的、傅潤華是寫批評文章的、他們也都有作品問世了。至該社指導員、聽說已聘定李青崖、徐志摩、鄭振鐸、趙景深、沈從文、及

邵洵美等六人擔任。」何家槐は多くの學生と同じく、徐志摩の影響によつてダンヌンツィオ（丹農雪鳥）を學んだものと思われる。何家槐の作品がチェーホフに近似するという評價は、洪深「評何家槐の曖昧」『青年界』第三卷第三號、一九三三年五月）にも見える。ところでここに名前の見える中公の文學學生達は、二、三年後には南京『文藝月刊』及び『新時代月刊』の常連として名を連ねていることが注目される。兩誌の性格を窺う手掛かりとなると思われるが、いまそのことに立ち入る餘裕はない。

(16) 「白虹發刊詞」（易家鉞編『白虹』創刊號、白虹月刊社、一九二四年四月）

(17) 王一心（生没年不明）は浙江金華の人、中公大學部を卒業後日本に留學、のち北平孔德學院教員、長城影片公司の編劇、『漢口日報』總編集、上海『詩歌月報』主筆、及び『大風三日刊』主編に任じた（橋川時雄『中國文化界人物總鑑』中華法令編印館、一九四〇年一〇月、の記述による）。なお王一心に「自傳」（武漢・輪底文藝社『文藝』第二卷第一期、一九三五年一〇月）という文章があるというが、未見である。

(18) 王一心「自序」『一心詩集』北新書局、一九三七年七月。沈從文の編集にかかる『劉宇詩選』は、鍾敬文が裝幀して、趙景深が校正に當つたという。

(19) 例えば卒業記念アルバム『中國公學大學部預科庚午級畢業紀念冊』（一九三〇年）所收の學生の詩文の中に、「這還是去年年底底一篇舊作、並且也曾給沈從文先生看過的。」（臺生「車上」）のような附記が見える。

(20) 註(18)所掲王一心「自序」。なお新東方詩社は「研究詩歌原理及作品、創建新東方詩歌」を掲げて傅潤華を正主任、王一心を副主任として組織された團體で、顧問就任を請われた傅東華・趙景深・孫俊工はいずれも中公の教員である（『文壇消息』、『讀書月刊』第二卷第二期、一九三一年五月）。

(21) 劉宇「想到」『新月』第二卷第一期、のち註(23)所掲『劉宇詩選』所收

(22) 王一心「序二」（王一心・李英樵『忘憂草前集』聯合書店、一九三一年一月）。同じく吳淞文壇の傅潤華「詩律的新路」『眞美善月刊』一九二九年一月）も同様の趣旨を述べているから、詩壇の蕭條たる情況は、吳淞における共通の認識であつたと思われる。

(23) 沈從文「序」（沈從文編『劉宇詩選』北新書局代售、一九三二年一月）。

(24) 劉宇「跋」（註(23)所掲書）

(25) 例えば小島久代「沈從文の初期作品（一九二四〜二七年）紹介」『明海大學外國語學部論集』第一集、一九八九年三月、のち『沈從文——人と作品』汲古書院、一九九七年六月所收）が國內におけるこの時期の沈從文研究の先驅けである。

(26) 「沈從文一向受知于徐志摩。從北平『晨報副刊』投稿起、後來在上海『新月』雜誌長期撰稿、以至最後被介紹到青島大學教國文、都是志摩幫助推轂。所以志摩死耗給他打擊是相當沉重的。沈從文一聲不響的立刻就到濟南去了。」（談徐志摩、註(1)所掲書所收）

(27) 註(18)所掲王一心「自序」。また王一心「憶詩人徐志摩」『新時代月刊』第五卷第四期、一九三三年一〇月）には、王が初めて徐志摩と面會し、電燈の下で詩について歡談した様子が描かれる。さらに王が何家槐と共に徐志摩の自宅を訪ねた際、何家槐が浙江・義烏の實家より梨を一籠持參した思い出も綴られており、王の徐志摩の詩に對する思いが、梨の甘酸っぱい味と清々しい香りとに重ね合わせられて甚だ情趣に富む。その際も話題は現代中國詩壇に及んだが、徐志摩は王の詩の草稿に批評を與えた後、彼の原稿にはすべて目を通して、すでに『小説月報』に投じた作品については二重投稿を避けて採らないうが、今後はよいものは『新月』に發表するのでもっと自分に見せるようにとの忠告を與えている。ところで、同じく中國公學大學部の學

生であり、その處女作「撲秋」の『新月』掲載（第三卷第一期）に當
たつて沈從文の盡力を得たとされる何其芳については、今回は説き及
ばなかったが、そのごく初期の作品が「新月派」の影響を受けたとす
る指摘がある（方敬「其芳最早的新文學朋友」、何其芳研究專集」四
川文藝出版社、一九八六年三月）。何其芳もまた、同じ流行の中にあっ
たと思われる。ただし、徐志摩がいかなる形で中公と関わっていたの
か、詳しいことはよく分からない。徐志摩が光華大學と並んで中國公
學の教壇にも立っていたとする記述もあるが（蔣復璁「徐志摩小傳」、
『徐志摩全集』第一輯、傳記文學出版社、一九六九年一月）、これを裏
付ける資料は今のところ見当たらない。

(28) 曾慶瑞「新編徐志摩年譜」、『徐志摩全集』第五卷、廣西民族出版社、
一九九一年。

(29) 何家槐「懷徐志摩先生」、『新月』第四卷第一期

(30) 上海圖書館近代文獻閱覽室「近代文獻期刊名目録」、及び劉大杰
「現代學生的使命」、『大東書局十五周年紀念冊』一九三一年八月）を
参照。

(31) 沈從文とこの夭折の女性畫家との交流については、追悼文「記蔡威
廉女士」、『沈從文文集』第十卷）を参照されたい。また『婦女雜誌』第
一五卷第七號（一九二九年七月）に蔡威廉の經歷を紹介した記事がある。

(32) 「阿麗思中國遊記」の原稿料に生活の糧を頼っていた沈從文は、代金
の受け取りに梁實秋の捺印が必要であったため、これを梁の自宅に求
めたが、その際玄關から入ることが出来ずに裏口に回った。使用人か
ら領收書を手渡された梁實秋は、沈從文の署名を確かめて押印してか
ら、降りて會おうとしたのだが、彼はすでに立ち去ったあとだったと
いう（梁實秋「憶沈從文」、註（一）所掲書）。同じ教師であっても沈
從文の立場はかくも弱く、絶えず周囲の顔色を窺い腰を低くしていな
ければならなかったように見える。

吳淞における沈從文

(33) 沈從文「記胡也頻」二六、『時報』一九三一年一月

(34) 野澤俊敬「胡也頻著作年表初稿」、『饗饗』創刊號、一九九三年八月

(35) 丁玲「胡也頻」、『文匯月刊』一九八〇年第一期、一九八〇年一月

(36) 趙景深「論何家槐的小説」、『讀書月刊』第二卷第四・五期、一九三
一年八月

(37) この二句の詩題は「戀愛到底什麼一回事」、『翡冷翠的一夜』（新月書
店、一九二七年九月）劈頭に付せられた序（陸小曼宛）に引く。詩の
全文は『志摩的詩』改訂版に初めて收められた。いま『徐志摩全集』第
一卷（廣西民族出版社、一九九一年七月）に據る。

(38) 趙景深「序」（沈從文編『劉宇詩選』北新書局代售、一九三二年一月）

(39) 上海圖書館近代文獻閱覽室「近代文獻期刊名目録」による。ただ
いま上海圖書館には第一期・第二期・第四期のみを存する。

(40) 拙論「上海時期に至る沈從文の小説について——「自殺」の主題と
描寫をめぐって」、『集刊東洋學』第八三號、二〇〇〇年五月

(41) 註（9）所掲「胡適遺稿及祕藏書信」第二七冊、八二頁

(42) 註（4）①所掲「課外作業一覽表」

(43) 『中國文學季刊』第一卷第一期（一九二九年八月）所掲劉宇「中國文
學系系會大事記」。王華蓮は張兆和氏と沈從文の戀愛にしばしば助言を
與えていた。張兆和氏の日記には Lotlo という愛稱でその名が見える。
『從文家書——從文兆和書信選』上海遠東出版社、一九九六年二月。

(44) 胡道靜『上海的定期刊物』（上海市通志館、一九三五年）のほか、該
誌第二期所掲の「下期第三號預告」に見える胡適「母親的訂婚」が實
際には『新月』第三卷第一期に掲載されていること、同じく沈從文「戲
子」は實際には發表されることがなかったと考えられることも、この
雜誌が第二期までで停刊したことを示唆する。

(45) 「每一個日子的意義在我只增加一種悲慟、心的下沉、生命的衰老、天
所頒給一個貧血人的東西、我沒有遁避、也沒有推辭、接到手上了。我

將在我名分上、還應很勇敢的承受一個稱呼，是我「無可救拔的頹廢。」
 「『沉』的序」、『中國文學季刊』第一卷第二號、一九三〇年三月、のち
 『沫沫集』所收。『沉』という書名の作品集は現存しない。

(46) 「生命的沫題記」(『現代文學』第一卷第一號、一九三〇年七月)。「生
 命的沫」という書物は現存しないが、この「題記」によれば「說故事
 人的故事」「夫婦」「道師與道場」「參軍」「龍朱」「菜園」「元宵」等一
 三篇を収めた短篇集であつたらしい。

(47) 「適之先生：近日來因爲喉部壞了，胸部半夜發燒作咳，故不敢到府上
 來。我得到醫生處去檢查一下，還有恐怕要打幾次針才有好的希望，「……」
 若是學校不讓我先支到一個月薪水，我是無辦法把自己處理一下的。這
 事我又得來麻煩先生，希望能夠因爲先生一個信給學校，得到即刻解決，
 身體壞點，心情也稀亂八糟了，不能讀書，不想教書，也不做文章，就
 只是不能節制的在一些瑣碎人事上生氣。「……」從文敬上 廿五」(註

(9) 所掲『胡適遺稿及祕藏書信』第二七冊、八〇頁
 (48) 「一九二九年胡適擔任上海附近吳淞中國公學校校長時，他請沈從文去教
 文學課與寫作。這可是簡破天荒創舉，因爲照過去規矩，教授必須有文
 凭。這一着對沈從文具有決定性意義。從此把他提升到中產階級。」(『沈
 從文傳』湖南文藝出版社、一九九二年二月、七五頁)

(49) 「『冬的空間』論——岳萌をめぐって」(『東北大學中國語學文學論集』
 第五號、二〇〇〇年十一月)は小論の續篇である。

(50) 註(6) 所掲『廢華氏年表』。なお「教職員履歷」(『十九年度國立武
 漢大學一覽』一九三一年)は沈從文の武漢赴任を一九三〇年八月と記
 すが、『胡適遺稿及祕藏書信』第二七冊所收の沈從文書信によつて、武
 漢到着の日子が九月一六日であることが分かる。

(51) 被災により廢墟と化した校舎の鮮明な寫眞が、『中國公學大學部民國
 廿一年度冬季畢業紀念刊』(一九三二年)に收められる。

(52) 註(14) 所掲『最近調查上海大中小學校名冊』